特集1

令和元年度 第29回 全国女性建築士連絡協議会東京大会報告

日時…2019年7月13日(土)・14日(日)
会場…日本建築学会建築会館

テーマ 未来へつなぐ居住環境づくり── 和の伝統技術の継承と創造

小野全子 (公社)日本建築士会連合会 女性委員会 委員長

令和元年度 第29回全国女性建築士連絡協議会東京大会も各都道府県建築士会女性委員会(部会)より大勢の皆様にご出席賜り、盛況に開催し、2日間のプログラムを滞りなく終えることができました。皆様に心より感謝申し上げます。

一昨年、西日本を中心とした「平成30年7月豪雨」により大勢の方が被災されました。そして9月には、「平成30年北海道胆振東部地震」が発生しました。心よりお見舞い申し上げます。一日も早く日常生活が戻られますようお祈りいたします。今年も北海道、福島県、岡山県より被災地報告をしていただきました。

今回は活動報告として、岩手県、秋田県より発表していただきました。どちらも歴史的な建造物に関する内容となり、地域の財産を大切にする姿勢が感じられました。ぜひ、継続して頂きたいと思います。

近年、人々のライフスタイルが変化する中、伝統的な住まいに暮らす人々が減り続けています。女性委員会では3年前の奈良大会より和の空間について考える取り組みをしてまいりました。そこで、今回のテーマとして、「未来へつなぐ居住環境づくり～和の伝統技術の継承と創造～」を掲げました。今回の大会では、有限会社原田左官工業所の原田宗亮氏をお招きし、伝統技術である左官のこれからの可能性と、若手や女性をプロとしてどのように育成されておられるのかをご講演いただきました。その後、子育てをしながら左官職人としてご活躍のmarumo工房の金澤萌氏をゲストに迎え、トークセッションを行いました。

2日目の8つの分科会では、熊本における被災地支援の取り組み、質の良い暖かさを考えた環境共生住宅、歴史的建物の活用、会員拡大に向けた取り組み、木造について学ぶ木造塾、子どもたちに木を知ってもらう取り組み、高齢社会の問題点、水際空間の利用など、さまざまな取り組みについてご報告いただき、その後、意見交換を行っていただきました。分科会で得た情報を共有して、発信して頂ければと思います。

連合会女性委員会では、今後も全国の女性委員会(部会)と連携し、継続的な取り組みとともに近年の重要課題にも取り組んでまいりたいと思います。未来へつなぐ豊かな居住環境を考えていきたいと思います。

令和元年度 第29回全国女性建築士連絡協議会 アピール

1. 私たちは、今回の協議会を通し、建築士としての視点、生活者としての視点から、住まいづくり、まちづくりを考え、未来に続く豊かな居住環境づくりを目指します。
2. 私たちは、今回の基調講演を通して、建築士として、和の伝統技術の継承と可能性を再認識し、次世代の育成を目指すとともに、受け継がれてきた地域の技術や素材を積極的に活用することに取り組んでまいります
3. 私たちは、継続してきた災害報告等を通し、女性建築士として、復興支援のあり方や地域における適切な防災活動と、これからの安全な暮らしを考えていきます。
4. 私たち女性建築士は、様々な専門分野の方々と連携しながら、建築士としての能力を活かし、豊かな社会の実現のために日々努力してまいります。

基調講演

「和の伝統技術の継承と創造」

――新たなプロの育て方――

原田宗亮 氏 | (有)原田左官工業所 代表取締役社長

原田宗亮(はらだ・むねあき) 氏 プロフィール

1974年 東京都生まれ
2000年 (有)原田左官工業所 入社
2007年 (有)原田左官工業所 代表取締役に就任
二級建築施工管理技士、左官基幹技能者、
東京都左官職組合連合会理事、同組合の青年部「平成会」部長、
(一社)日本左官業組合連合会青年部副部長
著書…『新たなプロの育て方』『世界で一番やさしい左官』

左官業と原田左官

左官は職人の平均年齢が60歳超の超高齢化の業界で、組合の青年部には70歳を超えた人もいます。そんな業界で技術を受け継ぎながら若い人に左官の面白さを知ってもらい、どうやって育てていくか、努力をしている会社のお話です。

原田左官工業所は昭和24年に祖父が個人で創業し、私は2000年入社で2007年に三代目として代替わりしました。現在は従業員数約50名規模の会社です。左官の他に、タイル、防水、ブロック積み工事も請けていて、コテを使う仕事として多能工化しています。もともとは町場の工務店の住宅の仕事がほとんどでしたが、仕事が減ってきたので、周辺の仕事もやるようになりました。今でも住宅の仕事もありますが、店舗の仕事が増えています。

原田左官の仕事の紹介

コンクリート打放し風仕上げ

石膏ボードやベニヤ下地の上に3mm位のセメントを塗ることでコンクリート打放しのフェイクの仕上げができ、曲面をつくるのも比較的簡単です。オフィスの中に土管みたいなものをつくって左官で仕上げたり、新宿のタピオカのお店では壁を木目の昔の型枠のイメージで仕上げていてインスタで非常に有名になっています。

モールテックス

モールテックスは、セメントの薄塗り仕上げで表面が非常に硬くて曲げても割れないため、このような連続したところに塗るとものすごく長いカウンターができます。

さまざまな造形

左官の良さとして厚みをつけて塗れるという点があります。モルタルを塗って削って流しもつくれます。硬化する前に中に金網などを入れて造形とすることもできます。木片を入れたり、フエルトを入れたり、ジョリパットも塗る前にシールを仕込み、シールを取るとちょっと変わった仕上げになります。

このように現場でカスタムメイドでいろんなことができます。左官の仕事じゃないと言われるかもしれませんが、アレンジ次第でいろんなことができます。

原田左官の特徴 女性職人

原田左官の特徴は、一つは女性職人の採用・育成をしていること、もう一つは若い人が多いことです。

女性職人は昭和62年に始まり、現在は10名の女性が在籍しています。左官の女性は増えてはいますが、まだまだ珍しい存在です。女性職人は特別な仕事をしているわけではなく左官全般をやっています。最近の特徴は結婚・出産を経ても左官の仕事を続けたいという人が増えていることです。うちの会社のママさん職人第1号は、入社3年目で結婚して子供ができ、男ばかりのマネジメント側は、女性職人は結婚したら辞めるものと思っていました。しかし彼女の方から続けたいという話があり、慌てて育児休暇制度をつくりました。お腹が大きくなると会社で見本をつくる仕事をやってもらい、産後は1年間休んで復帰してもらいました。やってみてわかったことですが、女性こそ技術を身につければ仕事復帰しやすいということに気づかされました。彼女は子供を2人産んで、子供たちが小学校に上がった今はフルタイムで働いて中心メンバーとなっています。また業界の女性代表として官邸に呼ばれて安倍首相と面会もしています。今はママ

原田左官工業所の仕事の紹介

左上から、**写真1**　コンクリート打放し風仕上げ、**写真2**　タピオカミルクティーのお店の壁、**写真3**　モールテックス仕上げのカウンター、**写真4**　流し、**写真5**　木片を散りばめた壁、**写真6**　フェルト糸が入った壁、**写真7**　版築壁

さん職人が2人いますし、「トークセッション」に登場される金澤さんもママさん職人です。

若手職人育成・定着のしくみ

原田左官には若手職人の育成のために、モデリング訓練、年明け披露会、ブラザーシスター制度という3つのしくみがあります。

モデリング訓練

モデリング訓練は、名人のお手本動画を見て動きを完全にコピーをするように塗り方を訓練するというものです。昔は入社してコテを持つまでに1～3年位かかり、仕事を見て覚え、習ったから「見習い」と言われていました。しかし若い子に「見て習え」と言っても難しいし、何から覚えたらいいか、きっかけがつかめない。そのため最初はこれを覚えなさいと与えるやり方です。モデリングを始めたのは札幌の中屋敷左官工業さんで、スポーツの育成方法を左官職人の新人育成に採り入れたのが最初です。今の若い子は教えてゴールを示すと素直にその通り頑張ります。タブレット等でお手本動画と自分の録画を同時に流して違いに気づかせ、修正して繰り返すということをやっています。見て習うということを体にしみこませ、入り口はここだとつかんでもらう現代版の見習いです。

年明け披露会

次は年明け披露会で、年明けとは年季が明け見習いの期間が終わる、という意味です。これは会社が一人前の職人になったことを大げさにセレモニーとしてお披露目する会です。本来は一生修行なんですが、若い人には長すぎてピンとこないので、まずは4年間頑張るという目標設定をします。4年間は大学と同じで本人にとっても励みになり、ちょうど良いと思っています。この時に記念のフォトブックを作成して、4年間の成長を写真で本人もまわりの人も振り返ることができます。

ブラザーシスター制度

ブラザーシスター制度は、大手企業のマネをしています。ちょっと上の先輩が一年生の面倒をみてあげ話を聞くしくみで、若手に定着してもらうにはコミュニケーションが重要なため、先輩との飲み会費用を会社が負担しています。1対1ではなくて、先輩少数対見習いさん大勢で、参加しやすい雰囲気でやってもらい、そこで人間関係の悩みやつまづきがあれば会社に報告してもらいます。どこの職場でも辞めるのは人間関係が原因だからです。また5年生以上を次の指導者に育てる訓練でもあります。

採用活動の工夫

最後に採用のお話です。今は若い人の取り合いで、求人を出してもなかなか来てもらえないため、工夫をしています。一つはホームページやSNSなどの自社メディア活用、もう一つは仕事旅行社への掲載です。

ホームページには採りたい年代層の人を多く出して、若い人が見たら自分がそこに入ることが想像できる内容にしています。また、入社後の訓練を前面に出して、何も知らなくても大丈夫だと背中を押す内容にしています。給料はそれが第一条件に入ってこられるのもミスマッチなので金額を出さないようにしています。SNSもたくさんの人に見てもらえるチャンスなので意識して数多く出していて、鹿児島や石垣島から来てくれる人がいます。

また、仕事旅行社という仕事体験をパッケージにして売る会社があり登録していますが、お金を払って仕事体験に来る人が年に60人位います。午前中に塗り体験、午後に現場見学をやっていて、現場見学がとても好評です。来る人の中で1割位が興味ありでこれがきっかけで入社しています。求人票だけだと会社を休みと給料で判断されてしまうし、小さな組織だからこそ仕事の中身を見てもらう必要性があると気づき、インターンシップを積極的に受け入れています。実際に見て納得して入ってもらうことで、入社してすぐ辞めるというミスマッチがなくなりました。

このように、入社した人をモデリング訓練で左官の入り口をつかんでもらって、そこからステップアップして4年たって一通り仕事ができた時にみんなでお祝いをして、少しずつ人を育てている会社です。今日は左官業という一つの事例の発表でしたけれども、みなさんの中でも役立つ部分があれば幸いです。

（文責…石貫方子女性委員会副委員長／（公社）大阪府建築士会）

トークセッション

ゲスト

原田宗亮 氏 | (有)原田左官工業所 代表取締役社長

金澤 萌 氏 | marumo工房、女性左官職人

司会

石貫方子 | 女性委員会副委員長/(公社)大阪府建築士会

金澤萌氏 プロフィール

1983年 東京生まれ
2001年 ものつくり大学第一期生として入学
2005年 左官工見習いとして(有)原田左官工業所へ入社
2008年 小林左官工業所立上げに携わる傍ら、製作活動(marumo工房)を始める
2010年 男の子を出産
2013年 marumo工房として独立、ものつくり大学非常勤講師

女性職人育成のきっかけ、職人になったきっかけと良かったこと困ったこと

原田　事務職の女性が「左官をやってみたい」と言ったのがきっかけです。彼女が見本をつくる時に模様をつけたり口紅を混ぜてみたりと、自由な発想でそれまでの常識を壊したのが面白いと評価を受け、仕事が増えていきました。昔からの職人は「あんなのは左官じゃない」と排除しようとする流れもあり、根付くまで大変だったようです。

金澤　自分は幼少期から物づくりが好きで、高校生の頃「大工になりたいからものつくり大学に行きます」と両親を説得しました。大学に入るまでは職人は大工しか知らなくて、家を建てるのにたくさんの職人が関わっていることを学び、その中で左官をやりたいと思うようになりました。インターンシップで原田左官にお世話になり、伝統的な左官と全然違う世界を知ってすごく面白くて、そのまま就職も原田左官に決めました。困ったことは14年前当時の建築現場はそんなにトイレが無くコンビニのトイレも少なくて、現場に行ってと言われたら、まずは地図で近所にトイレや公園がないかを探していました。

仕事と家庭・子育ての両立で工夫している点

金澤　小学校3年生になる男の子が1人います。0歳で保育園に入れて6年間はワンオペ育児で主人の協力はほとんど無い状況でした。保育園の送迎の時間内に自分の現場をどういう工程でいかに終わらせるかばかりを考えていました。他の職人より働く時間が短くて、そこで学習したのは意外とわがまま言っていいんだなということでした。この4月から2拠点生活になり、今は広島から出張という形で関東で仕事をしています。広島では主人が在宅で仕事をしているので、今までのワンオペが逆転して関東にいる間はひたすら仕事をしています。仕事が好きなので家族と相談しながら模索することになると思います。

左官の空間の魅力と可能性について

原田　左官は今でも現場で人が手で塗っている仕事だという点です。上手い下手もありますが、カスタムメイドがしやすく、現場ごとにアレンジした仕上げも可能という点です。

金澤　ものつくり大学の非常勤で左官の実技と技能検定の座学を教えていて「私、大学に入った時、左官を知らなかったんだよ」と言っています。左官の仕事が楽しいということと、大変だということも絶対に伝えています。女子学生をインターンシップで積極的に受け入れていて、女性職人を育てたいなと思い、こういう世界だというのを見て欲しいと思っています。

重いものも持たなければならない場合はどうしているのでしょうか？

金澤　最初はセメント袋も持ち上がらなかったんですけれども、続けていると必要な筋肉がついてきて持ち上がるようになりました。体力的なことは続ければ何とかなると思います。それよりは環境的に現場は寒いし暑いし、それに対する覚悟があるかということだと思います。

原田　今は男性の職人も70、80歳の人がいるので、より軽くという傾向もあるようです。

金澤さんが塗っていて一番気持ちよかった材料を教えてください。

金澤　さっき伝統的な左官はあまり興味が無いと言ったんですが、漆喰が良いと思います。昔のものはやっぱり良くて、エンドユーザーへも漆喰がいいですとお勧めしています。

(文責…女性委員会副委員長／(公社)大阪府建築士会)

活動報告

［秋田県］

「探し・残す」
――白井建築物の調査・保存・活用を考えて

松橋雅子 （一社）秋田県建築士会 女性委員長　清水川道子 （一社）秋田県建築士会 副委員長

平成26年度東北ブロック会女性委員会秋田大会において「再生へ」～これから向かう先～のテーマで、横手市増田の「内蔵」を用いて、そこに住み、守り、伝えることの重要性と、残し残されてきた「内蔵」が町を活気付ける重要な資源となっている現状を改めて学んだ。

それがきっかけとなり、平成27年度秋田県横手市で「ヘリテージマネジャー養成講習会」が開催され、女性委員会メンバーも多数参加。その後「あきたヘリテージマネジャー協議会」がスタートしている。また、平成30年度の大館市における養成講習会でも女性委員会から7名が参加し、各地域活動で保全・活用の活動を始めている。

今回はその中から、秋田県南部の湯沢雄勝支部にて平成19年より地域活動として取り組んでいる活動について報告する。

平成19年「歴史的建造物を活用したまちづくり事業（都市再生機構補助）」として酒造蔵の再活用の基本構想作成業務を、平成21年度「白井晟一に関する建築物調査等業務」も同事業の一環として企画された業務であり、湯沢雄勝建築士会がプロジェクトチームを結成、調査研究・作成・企画に取り組んだ。

対象となる現存する建築物

1、稲住温泉「浮雲」～「離れ客室3室」（杉亭・嵐亭・漣亭）
2、旧秋ノ宮村役場
3、旧雄勝町役場
4、琅玕席（山月席・山花席）
5、四同舎（旧湯沢酒造会館）
6、試作小住宅（後の顧空庵）

主な業務内容は、現存する白井晟一6作品の文献調査、展示パネルの作成、講演会・建物見学会の企画運営などである。当時は遠方から学生・ファンが多く訪れている一方、市民にはそれほど認知されていないのが実情であったが、市民が建築家・白井晟一に、そして白井建築の価値と地域との関連に関心を持てるよう、地元建築士たちがエピソードパネルを作成、講演会・建物見学会を開催したところ、予想を上回る市民が参加。この活動により、白井建築に対する市民の関心の高さに驚きと喜びを感じた。

平成29年度からは、現存する作品を価値ある建物として、湯沢市とともに国登録有形文化財の申請に向け調査研究活動中である（現在5作品のうち2作品が平成31年3月国登録有形文化財登録済）。

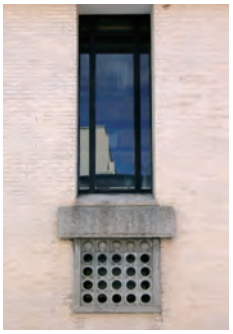
そして、今、「再生」に欠かせない卓越した技術・知識を持つ職人が、地域から自然消滅しようとしている。私たちはこの活動を通じ、人材育成と次世代への技術継承に取り組むこととし、今後も市民とともに保存・活用を模索しつつ、他のNPOや団体と連携し、観光事業をはじめ、まちづくりに生かすべき活動を継続中である。

これから向かう先

秋田県建築士会におけるヘリテージマネジャー（HM）の取り組みは日は浅いものの、紹介した湯沢雄勝地区における活動のほか、2019年は大館市「桜樽館」の耐震改修工事実施に関して見学・学習会を開催するなど、さらに実績を重ね地域に貢献できるよう、スキルアップ研修等を実施している。

住み継ぐものを失い、維持することが難しくなった古き良き建築物たちがまだまだ残されている。その建築物の持つ唯一無二の価値と、役割を終えた建築物も「再生」によって地域を変える、支える拠点となることに気づいてもらえるよう、生活者の目線で情報発信し、地域に理解者・協力者を増やしたい。今こそ、HMの取り組みを通して、人材育成と次世代への技術継承に取り組むことが、私たち建築士に求められている。

白井晟一に関する建築物調査等業務



四同舎のファサード。印象的な開口部・グリル

［岩手県］

盛岡市鉈屋町の町家再生の取り組み活動

大坂久子 | （一社）岩手県建築士会

町家再生

岩手県建築士会盛岡支部を中心に10年以上、盛岡市鉈屋町の町家再生・保存活用に携わっている。盛岡市鉈屋町は、江戸から明治にかけて北上川舟運の時代に栄えた場所である。明治23年の鉄道の開通により舟運の時代は終わり、盛岡駅に向かって街の中心軸が移動し始めたとともに、徐々に町家は住居化し活気が薄れていった。

近年、都市計画道路の拡張に伴い、町家として残っている建物を壊すのは忍びないと住民と専門家が立ち上がり、「盛岡まち並み塾」を設立し、町家の調査や歴史的資源を活用したまちづくりに取り組んでいる。

「盛岡まち並み塾」は、老朽化し存続が危ぶまれた町家を借り上げ、改修し、市民の自主運営による案内所「大慈清水御休み処」をオープンさせ、現在では他にも「旧八百倉」「三氐亭」といった町家見学・体験施設を運営している。

盛岡市鉈屋町における町家再生事業

修理・修景の現在

被災沿岸地域に関わる活動

岩手県建築士会女性委員会では、東日本大震災後、花咲プロジェクトと題して、津波被害の大きかった沿岸地域の仮設住宅を訪ねて花や野菜の苗を住民と一緒に植えるボランティアをしてきたが、災害公営住宅の建設がほぼ完了し、仮設住宅の終了に伴い、2017年11月でこの活動は終了となった。

しかし、被害に遭われた方々の生活の不便さや町の状況は完全によくなったわけではないため、2018年には沿岸視察を行った。陸前高田市では、高田松原の手前にある防潮堤でまったく海が見えなくなったこと、あるビルは震災遺構として自費で管理していることなど、まだまだ問題点があることを知る。今後もこのような活動を続けていきたい。

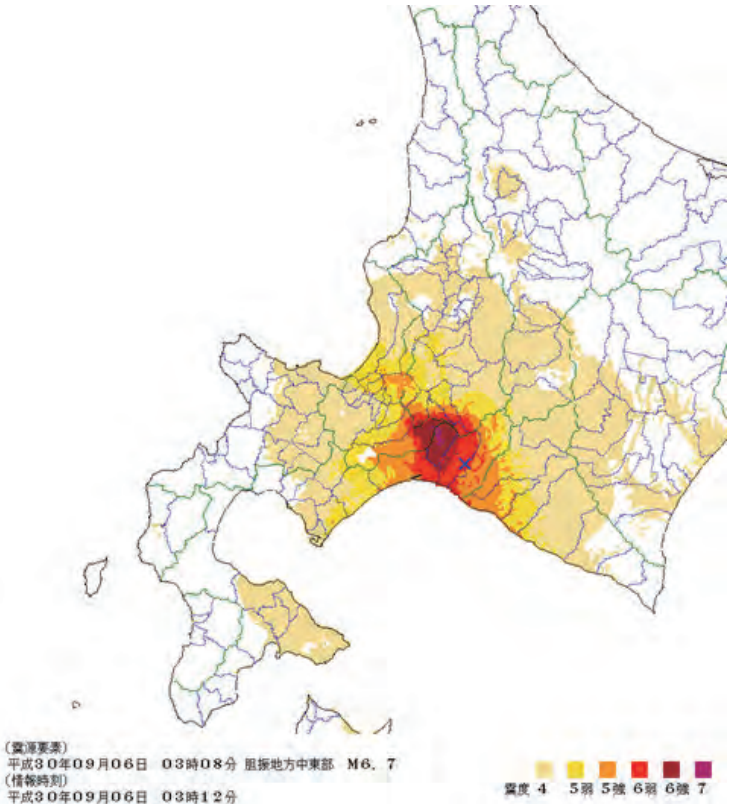
高田松原の手前にある防潮堤

被災地報告

［北海道］

胆振東部地震報告 および取り組みについて

小町美穂 | （一社）北海道建築士会



胆振東部地震の推計震度の分布

厚真町の土砂崩れの様子

2018年9月6日3時7分、北海道胆振地方中東部を震源とした地震が発生した。地震の規模はマグニチュード6.7、震源の深さは37km、最大震度7で、北海道では観測史上最大となった。被害状況は、消防庁集計（2019年1月28日）で死者42人、負傷者762人、住家の全壊462棟、半壊1,570棟、一部破損12,600棟で、震源に近い厚真町では土砂崩れによる死者が36人。国土交通省によると、崩壊面積は推定約13.4㎢で、明治以降日本最大であった。

また、大規模停電「ブラックアウト」の発生が北海道全域に被害を与えた。道内への電気の半分を供給していた苫東厚真火力発電所が地震によりボイラー管が破損、3基のうち2基が緊急停止し、道北・函館で停電が発生する。さらに18分後に残り1基も停止すると、連鎖的に他の発電所も停止、北海道・本州間連系設備の送電も止まり、道内の離島などを除くほぼ全域約295万戸で停電となった。その結果、広域で断水が発生したほか、JRをはじめすべての鉄道が運休、新千歳空港も閉鎖するなど交通機関への被害も大きかった。

地震発生後の取り組みとして、応急危険度判定については、胆振地域、札幌市ともに9月6日には対策本部を設置、8日より実施された。むかわ町・厚真町・安平町にて計69棟実施。札幌市においては538棟の判定活動を行っている。

応急仮設住宅は寒冷地仕様にて、一般向け住宅が11月末までに208戸が建設され、福祉仮設住宅は12月末に完成。厚真町で108名、安平町で36名が入居した。北海道建築士会では、被災住民を対象に10月15日～28日にかけ、厚真町・安平町・むかわ町の3町で住宅相談を開催。68件の相談があった。

これが厳寒期であったなら、被害はもっと大きくなっていただろうと思う。北海道における非常時の課題をこれからも考え続けたい。

［福島県］

ふくしまの現状

酒井美代子 | （公社）福島県建築士会女性委員会 委員長

原子力災害に伴う避難者数は、2012（平成24）年のピーク時に12市町村164,865人。2019（平成31）年3月現在では41,299人になった。今回は、町全体が帰還困難区域、福島県内でも唯一全町避難が続く双葉町を、双葉支部女性委員の岩本千夏さんと一緒に許可を取り取材をしてきた（撮影2019年6月7日）。

震災後の当時を振り返って

（双葉支部女性委員・岩本千夏さんの報告）

2011年3月11日事務所で仕事をしていて、現場に向かう車に乗った時に地震にあった。近所の福祉センターへ避難。3月12日川俣町への避難指示。それからは、親戚がいる栃木県黒磯市に避難。その後も避難先を転々とするが、現在は、黒磯の借上げアパートに居住し、福島県いわき市にもマンションを購入し、2地域居住している。昨年6月、福島県富岡町に会社の新社屋が完成し、12月から事業を再開することができた。慣れない富岡町ではあるが、新しい生活が始まった。

現在の双葉町の様子

帰還困難区域にはゲートがあり、許可書の提示をして中に入る。双葉町の中心部には壊れた家が建っているが、解体現場もある。2020年には常磐線が全線開通をめざし新しい駅舎を建設中だ。少し離れたエリアには、一日1,700台のトラックが行き来する中間貯蔵施設があり、この区域内に岩本さんの事務所はある。事務所は震災後のままになっていた。

双葉町の未来……

双葉町では、帰還のための地元の復興よりも、住民が安心して生活できるように「仮の町」の復興は進んでいる。2018年いわき市に完成した「復興公営住宅勿来酒井団地」だ。さまざまな形態の住宅、診療所、社協、町営の店舗もある。イベント広場では、伝統行事の「ダルマ市」「盆踊り大会」が開催される。

双葉支部女性委員・岩本千夏さん

被災時の室内の様子

双葉町中心部には、崩れたままの家が建ち並ぶ

［岡山県］

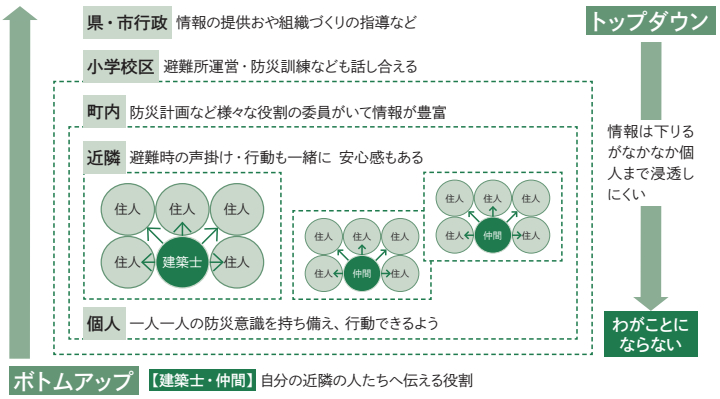
西日本豪雨災害からのメッセージ

――わがこととして

渡辺 睦 | （一社）岡山県建築士会女性部会、倉敷支部

『ボトムアップの防災』とは

まず各個人が考え、順番に輪が広がり、最後に地域単価での防災組織が出来上がること



「ボトムアップの防災」とは

被災地・住まいの現状

平成30年7月西日本を襲った豪雨災害から1年半が経った令和2年1月、倉敷市真備町では浸水した小学校が改修工事を終え再開、今年度中に他のすべての幼小中学校の再開が予定されている。幹線道路から見える景色は、公共・商業・医療施設など再建が進んでいるよう思える。一方、住宅地に目をやると、真新しい住宅、リフォームを終えた住宅、建設途中の住宅、更地になった団地跡、浸水時の状況をとどめた住宅と、さまざまな景色が広がっている。

昨年11月末までに仮設を退去した約1,500世帯のうち8割超が被災時の居住地に自宅を再建している。再び被災する不安を抱えつつも住み慣れた町へ戻り、生活をスタートさせている。一方、1月現在、仮設生活を送る被災者は2,000世帯となる。原則2年間の入居期限は、やむを得ない事情がある世帯を対象に1年の延長が認められた。町内の3カ所に災害公営住宅（約100戸）の建設も決まり、来年度中に完成の予定であるが、この戸数では今なお見通しの立てられない被災者の状況を考えると不安な数字に感じられる。

倉敷支部の活動

発災当初より継続している「おかやま水害住宅建築相談窓口」（電話相談・現地相談）は、昨年6月より相談窓口を真備支所に移し、毎月1回実施されている。相談者は数名であるが、時間が経過した中での深刻な内容が寄せられている。完成を急いだことによるリフォーム後のカビ発生、今後の浸水を考慮した家の在り方、公費解体の申請期限を目前にリフォームか解体かの決断などの相談もあった。復興の一番のネックは、やはり「資金面」で、年代や家族構成・保険の加入有無などによって大きな格差が生まれている。

手さぐりの活動の中で、相談員それぞれの対応や回答がまとまれば今後役立つのではないかと「水害住宅対応マニュアル」の作成が決まった。検討を重ね、災害前に知っておいてほしいことも構成に加え、より一層の内容充実と完成に向けて進んでいる。

伝える取り組み

木造住宅耐震診断訪問時、依頼者に押し付けではあるがハザードマップ（地震・液状化・津波・越水・洪水・土砂崩れ）の説明を始めた。住宅の耐震対策だけでなく他の災害や避難への注意喚起ができればとの思いからで、「真備のことがあって気にはしているが、見方がわからなかった。ここ、逃げないとまずいね」と言われる方もあった。

母親として、一番の気がかりは子どもたちのことである。今年度、小学校でPTA防災減災クラブをスタートし、啓発チラシを作成、配布している。将来、岡山から巣立ち全国に羽ばたく子どもたちの防災力＝想像力を高めてもらうこと、そして子どもたちから親や祖父母を巻き込み、ご近所・地域にその輪が広がっていくことを遠い目標としている。倉敷市では、新年度より小学3･5年生に防災教育の授業導入が決まり、中学校からは減災学習の案内が届いた。少しずつではあるが進んでいるのを感じる。

わがこととして

自分の命を守り、自分の大切な人の命を守るため、家族・地域・建築士の一員として、自分自身が災害を想定し備え、大切な――わが子と――防災減災意識の向上に努力し、「ボトムアップの防災」に取り組みたいと考えている。

真備決壊場所

真備支所相談窓口

分科会報告

A分科会 参加者…19名

被災地支援の取り組み

コメンテーター…木村洋子（福岡県建築士会）
司会…藤田ゆか里（福岡県建築士会）
アシスタント…竹﨑由美子（宮崎県建築士会）

熊本地震の直後に開設した「椿ヶ丘復興支援ハウス」における「住民主体の災害からの復興活動」についての報告いただいた後、意見交換を行った。

活動は、被災地の隣接県でありながら日帰では十分な支援活動ができないため、熊本市北区の空き家を借りたことに始まる。その地域は、被害が甚大であるにも関わらず行政の被災調査も受けられずに住民が不安な日々を過ごしている状況であった。

発災から18日後に地域の方々に呼び掛けて開いた第1回の住民会議には、ほとんどの世帯が家族で参加し、苦しい心情を吐露した。その後、住民会議・個別相談・被害調査を頻繁に繰り返し行い、ハウスは地域支援の拠点となる。建築士と住民の信頼関係の形成と共に住民同士の関係が深まり、半年後には勉強会など住民主体の動きが始まる。

「オープン外構の見守りのまちなみ」を地域の将来像とし、道路を狭くしている電柱の私有地への移設等を実行に移して行く。また、地域の実情を自らメディアに発信したことから拡がったさまざまな関係を力として復興へ大きく踏み出していく。

そこには震災を乗り越え共に支え合う人々の姿があった。この間の建築士の役割は、地域の力を信じて見守りつつ背中を押すことであった。建築を通して人生に関わる専門知識と様々な業務経験から得た能力と感性が住民を支え、社会的職能を発揮したと言える。

椿ヶ丘の3年間の記録は、応急危険度判定の制度を補完する支援、被災県に負担をかけずに行う支援、空き家を拠点とした支援、建築士の被災地でのありよう等、示唆に富みさまざまな課題を投げかける分科会となった。

（藤田ゆか里／福岡県建築士会）

A分科会活動紹介（2016年、2017年）

B分科会 参加者…30名

環境共生住宅 心地よい暖かさを求めて

コメンテーター…星ひとみ（宮城県建築士会）
司会…小林淑子（宮城県建築士会）

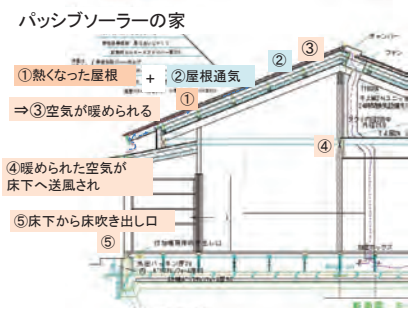
「心地よい暖かな住まいをもとめて」と題し、太陽熱集熱システムによる複合古民家実験住宅の報告と星さんの経験と所有者にも測定協力して頂いた、パッシブソーラーの家、二重通気の家、床暖房の家の温度湿度測定結果に基づく「暖かさ」について報告していただいた。まず築61年の古民家への屋根上及び南壁面集熱パネル設置と気流止めによる建物性能の向上と、その施工方法について報告。

次に既存住宅改修の際に感じた、断熱をしているのに寒いとは？ という疑問に、「心地よい暖かさ」を求めて、①空気がきれいであること、風が通ること、無垢材を使う（化学物質を使わない自然素材のしっくいなど）、②ほどほどの暖かさ。すきま風が入らないこと（床下から空気で暖めるのでほんわりと暖かい）、③機械だらけにしたくない。電気仕掛けを少なくしたい（余分な電磁波をカット）と、無垢材杉・ひのき等・断熱材セルロースファイバー（細部の隙間対策の施工を施す）・パッシブ空気集熱式ソーラーシステムの採用をした事例。1月に測定したパッシブソーラーの家（152㎡平屋）の測定結果は、1日の中で室内、床下温度とも約2℃程度しか変化せず、室内と天井床壁の表面温度も各表面温度間も差がなく（約1℃程度）、室内湿度もほぼ一定で、トータルのエネルギー消費量（28770MJ）と大変少なかった。二重通気の家（160㎡2F）測定結果は、1日の中で暖かい時間がある一方で夜間、外気の影響を受け易いという結果が見られ（温度差約4℃）、室内と各表面温度もばらつきがあり、壁表面と室内の温度差は5℃あった。室内湿度は、ほぼ一定だがトータルのエネルギー消量（69235MJ）が大きかった。

各建物で実際に体感した『暖かさ』と測定結果より、心地良い暖かさとは、床や壁、天井からの冷輻射熱を小さくし、上下の温度差を少なくすること、計画外のすきまを小さくすることではないかまた、パッシブエネルギーを使うことが省エネルギーであるとの結果報告となった。

（小林淑子／宮城県建築士会）

パッシブソーラーの家



パッシブソーラーの家 断面図

C分科会 参加者…30名

歴史的建造物と建物再生

コメンテーター…磯田節子（熊本県建築士会）
司会…八木景子（兵庫県建築士会）

平成28年（2016年）4月の熊本地震により、被害を受けた宇城市小川町での発災直後から現在に至る3年間の復興活動と問題点等を時系列で報告いただいた。

小川町は、日奈久断層上に位置し、震度6強を2度受けた場所である。また、江戸末期から明治期の町家が多く残存し、地域経済の中心地であった。地震前から地域内の登録文化財申請調査に係わっていた関係から発災直後から当該地に入り被災調査を開始した。残存した町家は土葺瓦や漆喰壁の崩落は見られたものの柱や梁の構造体は殆ど損傷がなく、改めて伝統構法の強さを実感したとのことだった。被災調査と並行して、住民相談会を開催し伝統的町家の修復が可能であることを伝え、修復の費用獲得に向け施主・建築士と協働で修復方法・見積等の検討をし、あらゆる補助申請を行い現時点で6件修復工事が完了、1件工事中、1件未着工とのことである。

現在商店街は、昔日の商業中心地であった面影はなく、「町家は修復されたものの、今後の町家や歴史的町並みをどう活用していくかは重い課題」として、地震後の翌年には商店街に「苅萱（かるかや）会」を設立し、月1回の割合で話合いも継続している。

この活動報告の中から、①各種専門家不足、②公費解体による町並みの損失、③構造的判断のむつかしさ、④価値を損なわない修復とは？ ⑤高齢化問題とこれからの経営、と5つの課題に分け、意見交換を行った。

①～④の問題は共通して専門家である私たちが、さまざまな職人や一般の方々に正しい知識を伝え、行政とは情報交換ができるよう共通の認識・意思疎通に必要な技術とスキルアップを日々重ねることが大事であることを再確認し、⑤については、若者の心をつかみ、まちに活かすため、SNSやFBなどを活用した情報発信をし、広く興味を持ってもらうことが建物だけでなくまちの再生にもつながるのではないかといった意見が交換された。

課題の重さと多さに時間が足りなくなったが、活発で有意義な意見交換が行われた。

（八木景子／兵庫県建築士会）

小川町商店街 中町・上町通り（撮影…坂田純一）

磯田節子氏による報告風景

D分科会 参加者…23名

会員拡大に向けた取り組み

コメンテーター…島田めぐみ（徳島県建築士会）
髙源真由美（徳島県建築士会）
司会…石貫方子（大阪府建築士会）
アシスタント…三宅登美恵（大阪府建築士会）

建築士の高齢化は年々進んでおり、建築士会の会員も減少と高齢化が著しい。D分科会では、全国の建築士会会員数等の現状を共有した上で、徳島県建築士会の事例を発表いただき、会員拡大のために建築士会はどのような取組みが考えられるのか意見交換を行った。

（公社）徳島県建築士会会員増強の取組み『2020・2020計画（ニコニコ・ニコニコプロジェクト）

徳島県建築士会では、「2020・2020計画」と題して2020年に会員を2020人に倍増する、というチャレンジを始めている。「一人の会員が1人の会員を連れてくる」という目標を掲げ、会員数拡大のために、具体的にはどのような取り組みをしているのかを報告いただいた。

「男女参画委員会の発足と展望」

徳島県建築士会では、会員が3,000名の頃に100名の女性建築士が在籍していたが、会員数が1,100名となった現在でも100名の女性建築士を維持している。女性部会をいったん廃止したものの、再び男女参画委員会を発足した経緯と現在の活動についてご報告いただいた。

意見交換・各地の事例紹介

①建築士会の魅力とは？…会員との交流／人脈／仕事の紹介／公益性の高い事業
②会員減少の理由…メリットが無い／会費が高い／時間が無い／地域密着意識の薄れ
③会員拡大のための活動…建築士以外の人へのアプローチ（建築施工管理技士、大学生等）／入会無料／お試し会員
④会員を増やすために必要なもの…魅力／認知／建築士以外への準会員枠の拡大
⑤自由意見…ITの活用／インセンティブ／ネットでは得られないものを伝える／若い人には会費が高い／産休中は会費を免除してはどうか、等の意見があった。

（石貫方子／大阪府建築士会）

D分科会風景

E分科会 参加者…24名

木造塾

コメンテーター…川口洋子（香川県建築士会）
司会…村上良枝（香川県建築士会）
アシスタント…新井千恵・藤本たみ・横田里美（香川県建築士会）

2010年立ち上げから10年目の「かがわ木造塾」について、これまでの経緯や年間事業の計画、予算組みも含め報告いただいた。

活動目的は、木造住宅に取り組む専門技術者に対し、良質なものづくりのための技術や幅広い知識、先進的な取り組みとその実践などについて学ぶ場を提供し、職務上必要とされる設計・施工のスキルを高める支援を行う。また人的交流を深めネットワークをつくる。地域木材の利活用による森林環境の保全に寄与することである。

座学は構造・耐震・省エネ環境・施工・林業・作庭等と多様な側面から学べる内容、県内外での実際に目で見て体感できるフィールドワーク、県内で活躍している建築関係者の話を聞くねほりはほり講座等を実施し、講座内容は、講師の選取と合わせ多くの方に興味いただけるよう趣向が凝らされている。その結果、毎年延べ250名程度の受講者、2010年～2018年までの9年間で講座参加者は2,031名となっている。また、受講生は設計者が半数、住宅メーカー工務店、職人、建築系の先生、その他の業種等さまざまな方が受講している。

「かがわ木造塾」が10年にわたり活発に継続されていることに倣い、グループワークでは「地方や少人数でも持続可能な勉強会の始め方・進め方」について意見交換を行った。分科会参加者は普段から勉強会等を主催や参加している方が多く、その中で感じている意見がでた。他団体や行政との連携で広げる、活動をするために必要な補助金や予算を得るために実績の数値化や透明化、体験や体感ができる内容、若い人に繋げていく、スタッフが楽しめる運営の持続が重要等、活発な意見交換が行われた。

（村上良枝／香川県建築士会）

E分科会発表資料より

E分科会発表資料より

F分科会 参加者…25名

子供と住環境

コメンテーター…辻 明子（福井県建築士会）
田上順子（和歌山県建築士会）
司会…吉田輝代美（福井県建築士会）
アシスタント…島田佐智代（福井県建築士会）

子供たちに木を使用した住教育の活動を続けている福井県と、その活動報告を参考に新たに始めた和歌山県の、両県の活動報告をして頂いた。

福井県建築士会では、2013年度～2018年度で小学校27クラス、公共施設7カ所において「出前授業（木の授業）」という形で、住教育に取り組んできました。授業を学校教育の中で行うには学校側との対応、予算、活動人員等多くの問題点も出て来ている。

計画→実行→評価を経て「これから、どうするか？」今、改善の段階に来た活動内容等、今後の住教育に向けての期待を述べて発表を終えた。

和歌山県建築士会ではきっかけは福井県の住教育活動についての報告。2017年度から親子木工教室を計画、まず自分たちが和歌山県の山や木について知る勉強会を実行など、開催に至るまでの経緯について報告して頂いた。木の国に暮らす建築士として住教育及び木育活動を通し、県産材である紀州材をどのように伝えていくか考え「3年後の私たちに期待してください」と力強い言葉も有った。拍子木の音と共に紙芝居の実演がはじまり～。低学年の子供たちが地元の木や木材に目を向けられるような内容で会場内も和み、その後の意見交換も活発な意見が出てきた。

「住教育の取組みをしている事例があるか」の問には女性委員会だけではなく、青年や県全体で取り組んでいる事例等内容もさまざま、特徴ある活動を実施している県も何県かあった。

「建築士として今後子供たちとの関わりを含め住教育を考える」の問には、活動を継続して行く難しさ、学校の授業に住の部分を盛り込む、担い手として建築士を選択してもらえるような住教育が必要など、短い時間でしたが活発な意見交換ができ、今後の住教育活動を期待させる分科会となった。

（吉田輝代美／福井県建築士会）

授業中6種類の木材の重さや色、匂いなど比べている

最後にできあがった時間割を持って、子どもたちと先生、士会の参加者全員で記念写真

G分科会 参加者…43名

高齢社会と住まい

コメンテーター…髙野栄子（岐阜県建築士会）
伊藤麻子（岐阜県建築士会）
司会…新海直美（北海道建築士会）
アシスタント…鈴木彩恵（北海道建築士会）

日本の65歳以上の人口は2025年には3,677万人に達し、高齢化率は30%を超えると予想されている。平成12年に介護保険制度における住宅改修が開始されてから、まもなく20年が経とうとしているが、「高齢者」と「住まい」に関する状況は今、どうなっているのだろうか。

岐阜県建築士会では平成28年に岐阜県建築士会まちづくり委員会の中に「福祉まちづくり部会」を設置、その中で「福祉まちづくり研修」を実施し、受講生を「福祉まちづくり建築士」として認定している。認定後、県の福祉・建築関係行政へも訪問し周知を依頼するなど積極的に活動をする様子や、相談者を理解し寄り添えるようにとフォローアップの研修・介護保険制度についての研修などを行っている様子を報告頂いた。また、実際に相談を受け相談員を派遣した事例として、脳梗塞を発症し左片麻痺となった相談者が自宅でリハビリをしながら暮らせる家にしたいとリフォームを希望された事例、進行性の難病を患った50代女性の屋外へのアプローチのための工事へのアドバイスの事例を発表。さらに、もっと一般の方々にも知ってほしいと始めた人形劇「住み慣れた家で暮らし続けるには～転ばぬ先の手すりのお話～」も動画で報告頂いた。

後半は意見交換が行われ、建築士が高齢者の住環境に関わる必要性を感じているという意見や、ケアマネージャー・福祉用具業者とどのように関わっていくのかの悩みなども聞かれ、また、全国の自治体での制度についてなど幅広い活動の話を伺うことができ、大変有意義な時間となった。

参加者の報告を聞いていると、高齢者住環境に関わる情報は多くはない状況であるように思う。このような場がもっと多く設けられる必要があると強く感じた分科会となった。

（新海直美／北海道建築士会）

人形劇「住み慣れた家で暮らし続けるには～転ばぬ先の手すりのお話～」

G分科会風景

H分科会 参加者…12名

クリークの再生とまちづくり

コメンテーター…滿原早苗（佐賀県建築士会）
司会…松野範子（山梨県建築士会）

佐賀平野のクリークを活かした取り組みを発表していただいた。

クリークとは「灌漑や交通に利用される小川・小運河、細かく枝分かれした水路・小川などのこと」である。江戸時代につくられた水利システムが主役の座を譲ったとはいえ現役で活躍している。

佐賀市の中心部を流れるクリークは、佐賀城下の人々の生活と密接に結びついていた。ところが、上下水道および道路などの整備により、生活の裏側の場所となっていく。そこで、建築士・行政・大学生・地域住民という方々をつなぎ「さがクリークネット」を発足した。清掃作業を行い、イベントを行い、再度賑わいを取り戻そうとさまざまな活動をしてきた。

2018年3月17日から10カ月間行われた「肥前さが幕末維新博覧会」での「オランダハウス」の設置。これにより通路とクリークを仕切っていたガードレールを撤去し、船着き場を新設。期間中の毎週土曜日に和船とカヤックの定期運航を行った。

分科会に参加した誰もがこの地を訪れたいと思ったところ、期間後、船着き場の保存のため奔走したが、その甲斐なく撤去しなければならなかったと報告され、とても残念だと声があがった。

このクリークという佐賀市特有の風土での取り組みの話ではあったが、郊外化により、まちの中心部は空き店舗や空き家が増えている状況は、ほかの地域でも同様。まちの内側から市民の手で魅力を発掘し、再度賑わいを取り戻すという点で、大変参考になる話だった。

こういった、現在も利用されながら残されている歴史を未来へつなぐという活動を、これからも続けていただきたい。

（松野範子／山梨県建築士会）

裏十間川体験会

新設された船着き場